

まふ で KO SO!

過去の記事は  
こちら

# 変化できる者が生き残る

野生動物 現地調査×ICT

「野生動物」と聞くと、最近ではシカ等による農作物被害やクマの出没などが話題で、どうしても「減らすべき存在」「害獣」といった否定的なイメージが先行しがちです。本来、野生動物は私たちの暮らしを豊かにし得る重要な「資源」でもあります。私が岐阜大で学生たちと取り組む「野生動物資源学」は、野生動物から新たな価値を創出することを目指す学問です。

野生動物の資源化とは、単に肉や皮を利用することにとどまりません。「美しい」「生態が面白い」と感じることも立派な価値。例えば、北海道の厳冬を生き抜く世界最小の哺乳類の子ビトガリネズミは、わずか体重2匁ほどです。彼らは冬眠せ

①山中に設置したスマートフォンで扉を開めることができる檻=揖斐川町で ②世界最小の哺乳類子ビトガリネズミ。小さな体でも北海道の厳冬を生き抜く=北海道浜中町で (いずれも森部准教授提供)



ず、絶えず獲物を食べ続けることで熱を生み出し、雪の下の世界で命をつないでいます。この驚異的なエネルギー代謝と適応戦略は、私たちに生命のたくましさを見せてくれます。

ただ、相手は自然です。野生動物は人間の都合どおりには動かず、調査や管理には多大な労力が必要です。そこで私は、泥



くさいフィールドワークに最先端の情報通信技術(ICT)を導入しました。安価で自作可能なこのシステムを用いれば、山中に設置した檻の様子をスマートフォンで確認し、自宅の布団の中からでもワンタップで扉を開めることができます。この他にも捕獲検知システムの開発と実装も実施してきています。



森部絢嗣さん

これらは単に「楽をするため」ではなく、人手不足や安全確保といった現場の課題に適応するための技術革新であり、動物の習性を読み解く生物学と、システムを構築する工学という異なる知恵を融合させたからこそ実現した成果です。今後は「人工知能(AI)との連携」に大きな期待を寄せています。

現在は、カメラに映った画像を人間が確認していますが、将

来的にはAIが「これはシカ」「これはタヌキ」と瞬時に判別し、「捕獲対象であるイノシシが入ったときだけ、自動で檻を開める」あるいは「人間に通知して閉める許可を求める」といった運用が可能になります。これにより、間違っただけの動物を捕まえる錯誤捕獲を減らせますし、人手不足が深刻な中山間地域でも、少人数で広範囲を効率的に管理できると考えています。

私は学生たちに「強い者が生き残るのではない。変化できる者が生き残るのだ」と伝えていきます。ダーウィンの進化論にまつわるこの言葉は、変化の激しい現代社会を生きる私たちに向けた確かな指針でもあります。

研究も人生も、成功への道は一つではありません。「動物が好き」という情熱は素晴らしい種ですが、それだけでは花開か

ないこともあります。だからこそ「あちこちに種をまいておく」ことが大切です。無関係に思える音楽や工作のスキルが、環境が整った瞬間に情熱と結びつき、誰にもまねできない「独自の武器」へと化けることがあるからです。偏差値のような単一の物差しでは測れない、環境の変化に合わせて自分を変えられる「柔軟性」こそが、これからの社会で生き抜く力になると考えています。

もりべ・じゅんじ 社会システム経営学環(応用生物科学部兼任)准教授。専門は野生動物資源学。名古屋大学大学院単位取得退学。



博士(農学)。